

清流

題字：芳野 充

令和6年12月30日
第96号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

徳やかに
静かに
清流のように

命を大切に味わう

十二月のあわただしい霏(ふ)気が、小倉南区のファストフード店内でおきた殺傷(ころし)事件で、さらに物々(ものもの)しい霏(ふ)気になりました。

事件がおきたお店が、我が家からそうとおく離れていないということに加え、事件に巻き込まれたのが中学三年生の女の子ということもあり、年齢のちかい子どもがいる我が家も他人事ではないニュースでした。また親族や町内、PTAなどの学校関係者、県外から友人・知人の心配の連絡もその深刻さを物語(ものがた)っているように感じました。

幸(さいわい)い事件発生から五日ほどで犯人は逮捕(たいほ)となり安堵(あんど)したものの、被害にあつたご家族や友人などの気持ちはどうしてはかり知れません。

わたしはつい、当たり前前に明日がやってきて、当たり前前のように食事を口にし、家族と会話をかわし、そして、仕事が忙しい、外が寒すぎる、あの人が気に食わない、思うようにいかないことだらけだ、と、ごたくを並べてしまいます。しかしよくよく考えると、その間にも時間は流れ、命(いのち)が縮(ちぢ)まっただけのことを忘れていたようです。

「『私がムダに過ごした今日は、昨日(きのう)亡(な)くなった人が痛切(つうせつ)に『生きてい』と願(ねが)った一日(いちにち)である』」

どなたがおっしゃったかは存(ぞん)じませんが、『一日(いちにち)一日(いちにち)を大切にしよう』『いまここをしっかりと味わおう』と思(おも)い直(なお)さざるを得(え)ない強い響(ひび)きを、そこに感じます。私たちは、せつなく授(あづか)りかっているへいま、この命(いのち)をムダにせず、きょう一日(いちにち)を大切に生きなければなりません」(『月刊素心集(すしん) 第百八号』池田繁美(ひら)著)

明日(あした)がくるのは当たり前前(まへ)ではない。愛(あい)する人がいつもそばに居(い)ることも、食(た)事を口(くち)にできるのも、仕事(しごと)ができることも、四季(しき)を感じ(か)られ、人と触(ふ)れ合(あ)うことができるのも、いまここに命(いのち)があり、一分(いちぶん)一秒(いちびょう)を過(と)せているからです。

約(やく)一年(いちねん)前(まへ)には、能(の)登(と)半(はん)島(とう)地(ち)震(しん)や航(こう)空(くう)機(き)事(じ)故(こ)が起(お)きました。いま一度、
「当たり前前(まへ)」を「有(あ)難(がた)」と考(かん)え、時(とき)間(かん)は有(あ)限(げん)であり、命(いのち)を大(だい)切(せつ)に味(あじ)わうことを再(あ)認(にん)識(し)しないといけな(い)い、そ(う)思(おも)わさ(れ)ま(し)た。

被害(ひがい)にあ(わ)れた方(かた)々(々)には心(こゝろ)よりご冥(めい)福(ふく)を祈(いの)ると共(とも)に、そ(の)ご家(か)族(ぞく)や友(とも)人(にん)の方(かた)々(々)が一日(いちにち)もはやく心(こゝろ)の傷(やけど)を癒(な)し、一(いっ)歩(ぽ)ずつ前(まへ)に歩(あ)きだ(せ)るよ(う)祈(いの)念(ねん)いた(し)ま(す)。「時(とき)は金(かね)なり」で(は)な(く)、「時(とき)は命(いのち)なり」と心(こゝろ)にき(ぎ)み、亡(な)くなら(れ)た方(かた)の分(ぶん)ま(で)一日(いちにち)一日(いちにち)を大(だい)切(せつ)に大(だい)切(せつ)に過(と)ご(さ)せ(て)いた(だ)き(ま)す。

加来

